

フランスへ旅立つ娘、幸子のための集いが、良人の誕生祝を兼ねて第一ホテルの集いで行われました。席上、指名を受けた娘の、七五三を二度やらせるような気持で帯もしめてやっつた、その姿が割合ととややかに立ち上りました。

「皆様、あととごさいました。元気でいってまいります。」

第一声は落ちついて心強いけました。続いて若い人の何か、もえた感激の言葉が出るものと一同は静かに待っておりました。幸子はニコリとしてからだを動かしたと思いましたが、もう椅子にかけてしまったその早さ、御挨拶はこれで終りなので。

少し間をおいて気がついた一同は、急激なすばらしい「拍手」をおくってくれました。ほっとした様な、おかしな様な、又可愛い様な気が、深いところから私にこみ上げてきて、今一度娘の横顔を見ましたら、上気してか、すばらしく血色がよく、ニコニコしています。幼顔が沢山あらわれているのを見て、「これで独りでどうやら行けるのかも知れない」と思いました。母としての涙が浮かんできました。

「コロバンと共に」 7

「ポーツ」と鳴る汽笛に私の胸はせまる。何処の船の出航だろうか？ 夕闇に別れの余韻が海の彼方に消えて行く。

娘の頃、横浜の義姉の家から程近い「万国橋」の上で、よくこの物悲しい汽笛の音を味った。送る人、送られる人、共に別れを告げて残る波止場の棧橋に、その見知らぬ人々の心を押しはかり、画いて見れば、一層と私の胸に異国の夢を深まらせたものだ。この、耳に与えられた感覚ばかりでなく、港泊りの外国船の、イルミネーションが暗い夜空に輝くばかりに目に映る。さぞかし船から眺めた海面も、こがね、しろがね、のさばる風のままに動いて如何ばかりの美しさだろうかと、星のきらめく夜空を多感な思いで仰ぐのだった。

其の頃、東洋汽船のトリオ船として、「天洋」「地洋」の地洋丸に義兄は機関長として乗り組んでいた。それ故、義姉の家庭は港の話や海の向うの話が多く、当時としての先端的な話題に、若い私の憧れや夢を充分満足させてくれる。ましてや、馬車道通りは外人相手の商館とあって、モダンな英国風の建物のウインドに並ぶ日本土産品としてのべつ甲細工、中でも日本風の人力車が今でも目に浮ぶ。一度は自分の髪飾りに載せて見たいと思っていたべつ甲の王冠風の櫛などは、時間の立つのも忘れていつまでも眺めていた。

幸子は末娘、幼い頃から、私が洋装の時は手にぶらさがり、着物の時は袖の先をいつの間にか手ぬぐいを絞る様にギリギリかくして、これにつかまって歩く子でした。出発前に、その話が出た時、「それじゃ今度の旅行には、お母さんの袂の先を切っておもたせになったら」と云われた親子、早速、交通信勢ではないが安全色、黄色のナイロンのハンケチの端を、二人で持ち合い、ギリギリしぼったのを靴に入れた。

妹幸子も姉の足跡をたどって

九月十七日、幸子は、友達から受けた美しい大輪の蘭の生花を胸に、S・A・Sで無事羽田を発ちました。そして最初の便りはローマから舞い込みました。

「ボンボンが私の留守に出るのね、私の挨拶を原稿にママに云われたのに、書かずに来てごめんさいね。ママから皆様によろしく云ってね。それからファイトがある」と一番先にほめられました。二十キロの

靴もふりまわされると元気をさせたのですが、早速ハイヒールの豆が痛くて。出発の時、ママから受けた注意をすぐ思い出しました。「ローマへ着いたら、低い軽い靴をすぐお買い」靴も買いましたから御安心を——。」

これを書いていると、どこかの希望の空へ飛び立つか、飛行機の音が耳にはいってきません。フランスでもオランダでも、イギリスでも、輝子の時と同じ様に、あたたかい好意が迎えてくれるだろう。アメリカでは、皇太子様の美しい国際的な御交際の香り高い空気が充滿している筈。ハワイでは、一つ一つ馥郁と香る花を通してレイが贈られるかしら。でもシカゴの合衆国安全大会に出席の義務は果してくるだろう……

幸子が健やかな幸福な旅を続けるように、空の彼方に消えてゆく飛行機に託して祈りました。

(幸子は、ボンボン同人の一人、私と幸子、そしてたえこの三人組で編集しています。幸子は娘、たえは娘同様な可憐な優しい良き一人です。何分ともよろしくお願い致します。)

門倉くら

こうした商館に出入りする人々は横浜ならではの見られぬ異国情緒に満ちた特別な雰囲気と溢れていた。東京の下町で大きく、駒下駄や雪駄の音と交り、港横浜のコツ／＼と鳴る靴の音は、何となく新しい、スピードのある生活を偲ぼせる様な気がした。

殊に、各国のレッテルが張られているトランクを見ると、持ち主の豊富な経験を黙っていても物語っている様に、それを持ち歩く外人もそして日本人も、まるで別世界の人の線に思え、何時の日か私もレッテル張ったトランクを持つて、コツ／＼と靴音を石畳みに響かす群に入りたいと

汽笛の音に思い起す娘時代、そして今現実に、今日我が子の手を引いて立っている床板は、あの憧れの郵船の欧州行き客船加茂丸の甲板だった。良人の晴れの旅立ち洋行の船出を一時間前に控えていた。小さな可愛い我が家庭で、出しては藏い、藏っては出して一生懸命詰めたあの茶色のカバンが、キャビンでんと収まり、良人が帰る時迄は、幾つかの外国のレッテルが張られ、若い良人の経験が深くなつた事を読みとれる事だろう。このキャビンも、良人がマルセイユ迄四十五日間過ごす海の上の寝床と思えば胸もせまる。

奥さん、奥さんの和服姿は、外人が着ている様で、御一緒いらしたら受けますよ。

等の囁やきにも私の心は躍らない。

東洋軒の幹部の方達、親戚の人達等が「お目出度う」「お目出度う」とニコ／＼祝って下さるのに、たゞ、その目、目、顔、顔、に挨拶を返し乍ら、記憶はいく答の私なの

に、この日の船上の出来事はポツとと霞んで感気松の様に、ざりとて忘れやらす、と云つても周囲の人々の観察は全部ゼロに等しい。

「ママ。ココモオフネナノ？」と妙子

「そうよ。お船の上よ」

五才の妙子は、私の袖を引つ張り乍ら、此の立っている板の間が動き出す事を恐れて、

「ママ。ババト一ショニ、フランスヘイッテシマウト、タイヘンヨ。オリマシヨウハヤク。ボウヤモネ」

大きくやに背負われたは、二才になる長男の国彦。坊やだけはババの華やかな洋行も、その後残されるママの淋しさも、船が動き出さないかと心配する妙子の気持も、何も知らない無感情のまま、むしろ大勢の人に囲まれ、滅多に見ないお船や海にすっかり御機嫌でニコニコして居る。

「ママ!! 子供を、子供を頼むよ」と力強い握手。結婚して初めて人前に於ける固い握手に、口を押えられ呼吸困難にでもなつた様なこの日の気持は、再びお互いにくり返す事は出来なだろ。今の時代は、古い世代の夫婦の別れは、言葉なく動作、目の動きや表情で互いの心を読みとる表現丈で終始した。

数分後、ドラの音と共に船は波止場を離れる。五色のテープの中に、右に左にふられる白いハンカチが目に見え、船足は早くなり、船と共に次第に遠く小さく打ち振る

良人の姿も消えて行く。

私は目をつぶり先刻、良人の茶色の目にうるんだものを感じがけず見て、始めて見る良人の感情家の一面を思い出し、ババは泣き虫ね」と心の中で思えば、ふいても私の頬に涙が伝う。今頃、良人の持つっている白麻のハンケチは……と。

其の夜、我が家を持ち帰った感激は、皆が深い眠りについた後独り机に向つて、初めて良人へ出す手紙を書きつけた。

主なき家は静かに子供の動作から始る。私の母に送られて長女が白百合の可愛い制服姿で元氣良く出掛けてしまえば、狭いと思つた我が家まで何か空ろに広く感じる。

床の間に積んで有る饅頭の包紙は、中味は全部ババの胴巻に、良人の好きな麻のハンケチの空箱が、すでに、スイスあたりの景色を見せていた。ふと置いて有る銀行の通帳を手にとり、私の頬に笑いが自然にこみ上げて来た。家庭を持ち、その家庭の経済からは、貯金と云う字には御縁がなかった。

貯金するならお前は上のらん、僕は下のらん

と、郵便貯金帳を大切にしまふ私を見ては冷やかす。

「いよ、貯金をしようと思ふよ」

「そんなお金がありますの」

「飲む機会が金という奴は大きいからな」

「そうですね」

「じゃ、先づ第一に銀行をきめなければね」

私が育つた下町の実家は酒屋だったので、俗に云う日銭が上つた。本郷の渡辺裁縫学校へ通つて居る姉が、自分で作

つる縞縞のふくきバッグの中に其の売上げを入れ、奇麗な着物に着更えて出かけて行く先は、東海銀行だつた。私の幼友達のお父さんも東海銀行員と、社会にうとい末子の私には、銀行と云えば日本銀行が最高で、あとは東海銀行しか判らなかつた。

「何処の銀行なのですか？」

「宮内省の御用銀行さ」

「何んていうの？」

「木挽町の十五銀行」

この十五銀行の、通帳から引き出されたお金が、良人の胃袋になるのかしら？土産物かしら？雰囲気かしら？と、元のもくあみになつた空通帳を手にしばらくぼんやりと考えたものだ。

寄港、寄港からの便りが届く。私は全く誇らしげに其れを眺めた。読むと云うより、良人が始めて踏む外地の、その土地、土地の香り迄運んで呉れる様な美しい絵葉書に、改めて懐しきを感じるのだった。

上海のわづかな下船の時間に、支那麻の夏の背広が出来上るなどとの便りに、港商売の如何に激しく又、如何にスピードが大事かを知る事が出来る。ヘルメット(裏側が青)に、かすかに薄い黄色の入った支那麻の服を着て立つ良人の姿を考え、印度洋を通つても一寸いける姿になつた事だろうと――

マルセイユへ、マルセイユへと、船あしは順調にナムンでいる。加茂丸には、松坂屋の先代社長、伊藤次郎左衛門さんが御一緒だつた。この時存じ上げた事が今日、コロパンと松坂屋さんを結ぶ、深いお取引きを頂く御縁が出来

たのだが。

ホームシックにかゝる様な感傷家の少い旅行者達らしく、目を眺めても泣かず船のスクリーニに吸い込まれる深淵の極への誘いにも応じないと見える。フランスへの生の希望が強いからと、自分に云いきかせやら、せめて留守中の我が家の気分を新しくしておこうと、そして、洋行帰りの良人を子供と共に待ちましようと思つた。

「ママ。ババガネ、妙子ニオニギョウサント、キレイナ、オヨウフクヲカッテクルツテ。坊ヤニハ、オモチャト、オヨウフク。」

と、私にも云い、人様からババの話聞かれる度に必ずくり返すこの言葉。夫婦同士の別れには、たゞ感激のみで言葉もなく過ぎてしまったのに、子供は何時の間に、ババと可愛い小指でお約束したのだろうか。出発したその翌日から、帰りを、そしてお土産を待ち初めた。

「ね、妙子。ババの御無事にお帰りになる様に、神様にお参りしましょうよ」

「エ、ママ、マイ日ユケカラ、ツレテッテネ」

と、その翌日から原宿の近くの、代々木八幡様に御参りに行く事にした。大きな二銭銅貨を、小さな可愛い手にしつかり握りしめ、お賽銭箱に入れるや五色の鈴の緒をつかまえて、チャリンと打ち握る。静かな境内に鳴り渡る鈴の音に、良人の無事を祈る私、小さな我が子は何を祈るのだろうか？

此の波止場の別れが、父と娘の久遠の別れの日になろうとは、神ならぬ身の誰が考え及んだ事だろう。

未完(門倉くら)